

とのしき ただし

殿敷侃：逆流の生まれるところ

2017年3月18日(土)～5月21日(日)

殿敷侃という作家の全貌に迫る展覧会。目まぐるしく変化した作風と多様な展開の変遷をたどる

広島出身の作家、殿敷侃(1942-1992)は29歳で画家を志し、本格的な制作を開始しました。70年代からは生活と創作の拠点を山口県の長門市に移し、両親と自身の被爆体験に向き合い緻密な点描による絵画、版画作品を制作します。

その後80年代に入ると、シルクスクリーンの実験的制作や、インスタレーション的な提示方法を通して、作風を大きく展開させます。また80年代半ばからは、廃棄物や漂流物を素材としたダイナミックなインスタレーションを多数実現させ、現代の消費社会や環境破壊へと向けられた問題意識に基づく創作として高い評価を受け、国内外の展覧会での発表を重ねていきます。そして、今後のさらなる活躍が期待されるなか、50歳にしてこの世を去りました。

近年、殿敷侃の創作が社会的なテーマへの取り組みや、地域住民との協働による制作として再評価されるなか、没後25年を迎える広島ゆかりの作家として、その活動を包括的に振り返ります。30年足らずの間に目まぐるしく作風を変え、多様な展開を遂げたその変遷をたどり、また一時的なインスタレーションとして実作品が残されていない晩年の活動については記録や関連資料を紹介しながら、殿敷侃という作家の全貌に迫ります。

殿敷侃作品が私たちの意識に引き起こす「逆流」とは

「逆流」とは、晩年の殿敷侃が自身の制作に対して用いた言葉で、忘れられた記憶や、脇に追いやられた存在が、強引に人びとの意識に現れる様を意味しています。殿敷侃が引き起こした逆流とは、彼が何に苦悩し、何に抗い、何を引き受けて生み出されたものなのか、そして、彼の残した足跡が私たちにどのような逆流を引き起こし得るのでしょうか。本展はその問いに答えるためのヒントとなるはずです。

開催概要

【会期】	2017年3月18日(土)～5月21日(日)
【開館時間】	10:00-17:00 ※入場は閉館30分前まで
【休館日】	月曜日(3月20日(月・祝)を除く)、3月21日(火)
【観覧料】	一般1,030(820)円、大学生720(620)円、高校生・65歳以上510(410)円 ※()内は前売りおよび30人以上の団体料金 ※中学生以下無料 ※5月5日(こどもの日)は高校生無料
【主催】	広島市現代美術館、中国新聞社
【後援】	広島県、広島市教育委員会、広島エフエム放送、尾道エフエム放送

作家略歴

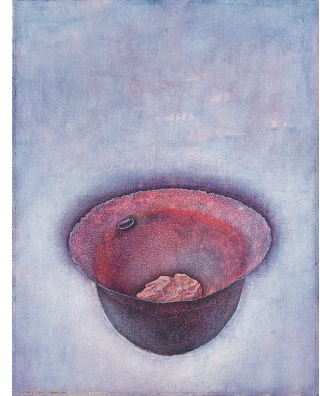
殿敷侃(とのしき・ただし)

- 1942年 広島市に生まれる
- 1945年 原爆投下直後の広島市内に入り、二次被爆
- 1971年 山口県長門市に移る
- 1986年 個展「COOKING MANNER OF OKONOMIYAKI DISHES」(秋山画廊、東京)
- 1987年 イベント「まっ赤にぬられてヒロシマが視えた」(広島平和公園および広島市街)
- 1988年 「戦後美術の原像展：戦争の刻印と鎮魂」(いわき市立美術館、福島)
- 1991年 「<物体>詩一思考するオブジェからGOMI・ARTへ」(板橋区立美術館、東京)
- 1992年 肝臓癌のため死去
- 2014年 横浜トリエンナーレ2014(横浜美術館、新港ピアほか)

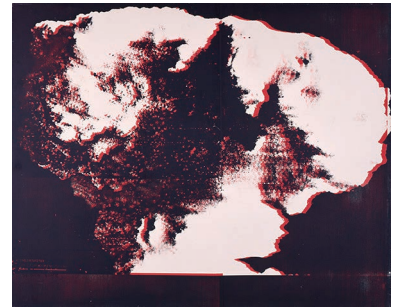
【臨時休館のご案内】下記の期間、施設改修工事のため臨時休館いたします。

2017年1月23日(月)～3月17日(金)

※お問い合わせ等は通常どおりご連絡ください。(広報担当：後藤、鈴木 TEL082-264-1146)



《釋寛量信士(鉄かぶと)》1977



《HYDROGEN BOMB (2)》1981



《JUPITER 1》1985頃



《タイヤの生る木 [Plan.7]》1991
写真：中本修造